

がん患者 寺院に憩う



「がん同窓会」に集い、歌を歌う碓井住職(右から2人目)たち
(広島市東区)

広島市東区牛田本町の浄土真宗本願寺派光明寺が4月、がん患者たちが憩い語らう「がん同窓会」ふるさと・うたのひろば」を始めた。今後も偶数月の初めに開く。進行性の胃がんの手術を昨年受けた碓井真行住職(68)が、入院先の病棟で沈み込む患者に触れたのがきっかけ。仏教を通じて死への不安を和らげる場を目指す。(桜井邦彦)

広島市の光明寺隔月で「同窓会」

4月1日にあった初回を味わいながら自分の病は、碓井住職を含めて5 気への悩みや日々の楽しみが参加した。茶や菓子みをそれぞれ話し、童謡

仏教に触れ不安緩和

や唱歌集から「どこかで春が」「かあさんの歌」「知床旅情」などの好きな曲を選んで、伴奏なしで歌った。

住職も昨年手術

碓井住職は集いの冒頭で、「社会の物差しで見ると人は死ぬと終わりがもしれないが、広い宇宙の中でいのちは無限にながっている。そう思えると安心できる」とし、「今は元気であっても人は必ず死ぬ。その事実をはつきりと教えてくれたがんは私の先生だと思っている。死は自然なこと。通過点にすぎない」と説いた。

初回は、同寺の門信徒たちからの口コミで集いを知った人たちが参加

し、がん患者でない歌好きの人も加わった。「病気が付き合っていく勇気が湧いてきた」「ご住職の話聞いて死と向き合うヒントをもらえた」など受け止めた。かつて、大腸がんの手術を経験した広島市東区(83)は「高齢であり、老人会にも行っていないので、毎日が孤独で新聞を読むことだけが楽しみ。皆さんが歩んできた人生に触れられ、徐々に歌も歌えて、有意義で楽しい時間だった」と笑顔を見せた。

心が楽になる

若い頃、画家として活動していた碓井住職は、父が病死したため東京から帰郷し、35歳で同寺の住職を継いだ。「あの頃は身内が亡くなると泣いて、人間は死ぬと終わりと考えていた。仏教に出あえてよかったと思う」と振り返る。

碓井住職は昨年2月に胃がんが見つかり、広島市内の病院で翌月に手術を受けた。腫瘍は大きく、リンパ節にも転移。医師からは「進行性のため、手術後の生存率は50%」と宣告された。そうした状況で碓井住職の支えになったのが仏教の教えだった。「この身は滅んでもいのちは途切れることなく、お浄土に生まれさせていただけ。そう思うと、体の痛みはあっても苦しみや悲しみがこみ上げてくることはなかったという。」

「がん同窓会」ふるさと・うたのひろば」の次回は6月2日午後1時から。その後は8、10、12月の1日に予定する。住職の話、参加者同士の思いの分かち合い、歌など。無料。光明寺☎0822(221)1948。